山　草　記

――フクジュソウの章――

札幌市　丹　征昭

北海道の3月は、春が駈け足で近づいてくる月である。3月という月をアイヌの人たちはトイタンネ・チュプ（日のびる月）と呼んだ。この簡潔な呼称に、春を間近にした悦びが籠められていることを感じ取れるのは、極寒と氷雪の長い冬を、生活者として体験した者だけであると思う。しかし一口に北海道の3月といっても、近づく春の歩みはずいぶん違っていて、平野部では気温が上がって融雪が進むが、山間部ではまだ当分は寒気と風雪の季節がつづく。流氷に閉ざされたオホーツク沿岸の「海明」も4月の声を聞くころである。

僕の住む谷に春が近づくのは平野部より遅いが、それでも3月の声を聞くと、あたりはどこも、めっきり春めいてくる。積雪量が見た目にも変化を見せるのは、まだ半月も先のことだが、強い日差しを受けて光る雪と、樹林の翳は息をのむほどに美しいコントラストを見せてくれるようになるし、雪面を渡る風にも、たしかな温もりが感じ取れるようになる。

この谷に春を告げるのは、何といっても南風と堅雪である。南風も北風も同じ風に違いないが、その吹く音はどことなく違って聞こえるように気がする。南風が幾度か吹き、寒気も幾度が戻ったりするうちに、雪面は堅く締ってきて、橇にもスキーにも飽きた子供たちが、堅雪の上を歓声をあげて走り回るようになる。南に向いた尾根の斜面では木の根本の雪が円く解け、沢辺の草付きの斜面で雪がずり落ちて、早くも土が顔を出すと、沢の水音は日を追って大きく響くようになる。その水音が昼だけでなく、夜も大きく響きつづけるようになると、本物の春は近い。

夜更けの静けさの中に、かすかに伝わってくる物音に気づいて「風かな、沢の音かな」と話しながら、二重に閉ざした窓を開け、重々しい沢の水音を聴くのは、毎年のことでありながら、そのたびに新鮮な悦びを感じるのである。

このころになると、僕たちは堅雪の上を歩いてフクジュソウを掘りに行く。まだまだ雪が深くて、たとえ群生地を知っていても、当てずっぽうに雪を掘るのでは見つけにくいが、去年の春につけたナタ目が、容易に1株のフクジュソウを見つけさせてくれるのである。

谷に住みはじめたころは、1メートル余りの積雪に幾つもの穴を苦労して掘りながら手ぶらで帰ったものであったが、今では春の山菜採りのときに、木の根元近くに生えている株を見つけると、その木にナタで目印をつけておくのである。いうなれば1年がかりのフクジュソウ採りで、ずいぶん気の長い話だと思われるに違いないが、それほどまでにフクジュソウは春を告げる花